

青橋商店
AOHASHI NOVELS

アイシヤ マリナ ミリス

刻印されたエルフ母娘



成人向け
ADULT ONLY

青橋由高
安藤智也
illustration

Story

美を極めたとも称されるエルフの至宝・王妃アイシャ。
母とはまた異なる美しさと魅力を持つ長女マリナと次女ミス。
卑劣な畏に嵌められ、望まぬ肉悦を与えられ、愛する者たちを裏切りながらも
女の悦びに沈まされる三人の麗しき母娘。
永遠に続くかと思われた背徳の日々は、
しかし、誰もが予想しなかった脅威によって終焉が近づく。
「そんなところ、入れたらイヤァッ！ 深い、深いのお！」
もう一つの純潔を奪われるミス。
「お父様、ごめんなさい……許してくださいませ……アァッ！」
父レオンに許しを請いながら仇敵の前で恥を晒すマリナ。
「ダメ、吸わないで……あぁっ、どうしてお乳が……ひどい、
あなたは本当にひどい男だわ、ギユネイ……ひいん！ イク……イクッ!!」
娘たちに再び母乳を吸われたまま、夫ではない男に貫かれ絶頂するアイシャ。
「身体だけでなく心にも、永久に消えない刻印を残させていただきます」
高貴なる母娘を蹂躪し続けたギユネイが、彼女たちから最後に奪ったものは……。

「アイシヤ、マリナ、ミリス
刻印されたエルフ^{おやこ}母娘」

青橋由高^{あおはしゆたか}（著）
安藤智也^{あんどうともや}（イラスト）

目次

プロローグ

5

第一章

7

第二章

65

第三章

123

エピローグ

173

あとがき

175

電子版あとがき

177

私たちエルフ族の多くは、人間という種族を忌避しています。もっとはっきり言えば、見下しています。

醜くて、下品で、粗暴で、狡猾で、そのくせエルフとは比べものにならないほど短命な人間を、私も忌み嫌っていました。

けれど私はそんな人間の、魔術師の中年男と関係を持ちました。しかも、すでに夫が、二人の娘がいる身でありながら。

この男は、どう鼻肩目に評しても善良とは言い難い存在です。その卓越した頭脳や魔力、技術、経験を、己の歪んだ欲望のために躊躇なく費やすことのできる人物なのです。

私は、彼に凌辱されました。卑劣な畏にかけられ、私の退路を全て奪った上で、人妻であるこの身を奪われました。普通の人生では絶対に経験することのない、淫猥な責め苦を与えられました。

しかし、私は気づいてしまいます。己がこの人間の男に、彼に心惹かれていることに。肉体のみならず、心まで彼のものにされていた事実。

私は彼の子を孕み、産みました。可愛い、可愛い男の子です。
今から、二十年ほど前の話です。

第一章

恵まれた資源、成熟した経済、豊かな資金を投資した軍備を誇るエルフ王国は近隣諸国との関係も良好で、大陸では最も安定した地域だった。

こういった国にとって警戒すべきは内部からの腐敗だが、エルフ王国には英雄王レオンという圧倒的なカリスマの存在があった。しかもこの王はまだ若く、エルフ族の長い寿命を考慮すれば、向こう数百年は安泰だろうと誰しもが信じていた。ごく一部の者を除いて。

「ギユネイ、この報告をどう思う？」

その数少ない一人、レオンが深刻な顔で人間の魔術師に意見を求める。

「ここにはあなたしかいませんから正直に申し上げますが……考え得る最悪の事態を、さらに悪化させた状況になるかと」

元から陰気な顔をさらに曇らせた禿頭の中年男が、低い声で答える。

「ご存じのとおり私は脆弱で臆病な人間ですので、常に最悪の状況を想定して事に当たります。冒険中はよく、そのことで仲間にかかわれたものですが」

「お前のその慎重さで私たちは何度も助けられた。仲間も感謝している。もちろん、

私もだ、ギユネイ。それは昔も今も変わらない」

「ありがとうございます。……けれど、今回ばかりはもっと慎重に、細心の注意を払うべきだったと猛省しております」

「いや、お前に責はない。あるとすれば、臣下を、国民を裏切りに走らせた頼りない王だろう」

執務室のソファにもたれかかった王が、深く、長いため息をついた。整った顔が苦悶に歪むが、そういった表情ですら絵になるほどの美貌だった。

(マリナ様が今のレオン王を見たらどのような反応をするか、少々気になるところではありますが、さすがそういった悪ふざげができる状況でもないですね)

レオンとギユネイを悩ませてるのは、エルフ王国に迫る、恐るべき敵の存在だ。

「交渉を通じる相手であれば、いくらでも手を尽くすのですが」

「ああ、そうであれば、私はとっくにお前を特使で派遣していたさ。だが、さすがのお前でも、墮竜どもとは会話できまい？」

「話を通じるのでしたら、私たちもあれほどの苦労をせずとも済んだでしょうね」

この世界で最強の生物である竜の死骸を、邪法で蘇らせたのが墮竜だ。意志はすたなく、竜の本能だけが残っているのが、逆に脅威となる。

「墮竜への対処法は、裏で操っている者を潰すのが最善です。しかしそいつらを見つ

けられない場合は、かつての私たちと同じように、墮竜を退治するしかなくなりま
す」

「あれは……面倒だったな。一撃必殺のブレスを連発するわ、鱗はバカみたいに硬い
わ、魔法攻撃はしてくるわ、空を飛ぶわ、傷はすぐ治るわ、できれば二度と戦いたく
ない相手だ」

「普通は、竜と戦って生き残れる者などいませんよ。しかも、面倒程度で済ませるの
はあなたくらいです、レオン王」

半ば呆れつつ、ギユネイが片頬を歪めて笑う。

「無論、我が国を守るためなら、幾度だろうとも戦おう。しかし……」

「ええ、一匹二匹ならば、どうとでもなります。ですが、さすがにこの数はどうにも
なりません。報告が間違いであって欲しいと願ったのは、私も初めてですよ」

各地に派遣した者たちからの報告書には、墮竜が群れでエルフ王国に向かってると
記されていた。その数、およそ三百。

「一年間に目撃される竜の数が十体程度ですからね、常軌を逸した数です。どれだけの
時間をかけてここまで準備をしてきたのか、その執念には正直、感心するところもあ
ります」

アイシャのために人生すべてを投じた魔術師だからこそその言葉だった。

「おいおい、感心してる場合ではないぞ、ギュネイ。それこそ大陸中の戦力をかき集めても太刀打ちできるか怪しいほどの敵だ。なにか、手はないのか？」

「まずは、情報収集を。墮竜どもを蘇らせた者の一部でも生き残りがいれば、多少なりとも敵を減らせます。現状では、情報が少なすぎます。私も手を尽くしますので、レオン王も是非、各方面に協力を求めてください」

「もちろんだ」

「ああ、それと、ミリス様は早めにこちらに戻ってもらったほうがよろしいでしょう」

「む。そうだな。マリナにも、しばらくは国から出ないよう伝えておこう」

娘にはとことん甘いレオンが父親の顔になるが、一瞬で険しい王のものに戻る。

それだけ、事態が逼迫している証だった。

エルフ王国の上層部には、日に日に悲壮感が漂い始めていた。原因は、次々と届く墮竜関連の情報だ。

連日、秘密裏に開かれる対策会議では、絶望のあまり顔を覆う大臣すら現れた。

普段の会議では必ず出てくるギュネイへのいわれなき批判も、今回ばかりはほとん

どない。いざというとき頼りになるのがこの人間だとみな理解してることもあるが、墮竜騒ぎの背後にいたのが、同族のエルフだと判明したせいだろう。

「ギユネイ、ここまでの調査でわかったことの説明を」

「は。……墮竜を復活させたのは、数百年前に消滅したと思われてた邪神崇拜者たちです。すでにほぼ全員が殉教したため詳細はわかりませんが、大半がエルフ族だった模様です」

ギユネイの報告に、会議室の空気がさらに重苦しくなる。かつてエルフ族を二分した争いの陰にもこの邪教の存在があったらしいが、ギユネイは書物でしか知らない。（さすが長寿のエルフですね、私にとっては歴史上の出来事でも、この方たちにとっては、自らが体験してきた過去なのですから）

すっかり静かになった中、ギユネイは淡々と報告を続ける。

「通常は、術者を倒せば墮竜は止まります。元々は意志のない死骸ですからね。ですが、今回は術者がみな殉教したため、この手は使えません。私の調査したところ、どうも術者は自らを贅とし、甦った墮竜に己の意識を移し替えたようなのです」

黒ローブの魔術師の説明に、エルフたちがざわつく。理解できた者は恐怖の、できなかった者は嫌悪の表情を浮かべる。

「簡単に言いますと……狂信者の魂を宿したゾンビドラゴンが約三百頭、我が国に向

かつてる事態なのです。そして、彼らの目的はエルフ王国の殲滅、です。原因は……人間である私よりも、みなさまのほうがよくご存じでしょう」

昔の争いの恨みを晴らそうとする連中の自爆テロと、ギユネイは認識していた。厳密には色々な要素が絡んでるのだろうが、興味はない。ギユネイにとって重要なのは、現実には迫ってる危機をどう乗り切るか、その一点だからだ。

（狙いが王国、土地だけであれば、最悪ここを放棄する手もありますが、エルフ族そのものの殲滅が狙いだと、そうもいきませんからね。まったく、困った連中です）

こほん、と咳払いをしてから、要点だけを告げる。

「つまり我々にできる対処法は、墮竜の殲滅、これのみです。そして、残された時間はそう多くないのです。どうか、覚悟を決めていただきたい」

誰も、返事をしなかった。英雄王レオンを除いては。

（ああ、まったく意気地のない連中ばかりです。私はもうとっくに覚悟を固めたというのに。……レオン王はこの先も苦勞されそうですね。まあ、その頃には私はこの世にいないでしょうから、気にしてもしょうがないのですが）

墮竜の報告を受けてからの一ヶ月、ギユネイは多忙を極めた。公務に加え、ギユネ

イ個人としてやるべきこと、片付けておかなければならないことが山のようにあったからだ。

(アイシャ様、マリナ様、ミリス様をこの腕に抱けた時点で、私の人生は勝利で確定しています。細かい思い残しもなくもないですが、トータルでは最高の人生だったと言えるでしょうね)

ギユネイは、死を覚悟していた。同時に、どのような犠牲を払ってでも、アイシャ、マリナ、ミリスを守る決意を固めていた。この三人さえ無事ならば、他はいつでもよかった。次に大切なのは、助手であり愛人であるナインだ。

「おや？ これはこれはアイシャ様。このような夜更けに、どうかされましたか？」
仕事を終え、疲労で重くなった身体で城内の私室に戻ろうとしたギユネイの前に立つ者があった。王妃アイシャだった。

「夜更けになったのは、あなたが遅かったせいでしょう。私をどれだけ待たせるつもりですか」

「申し訳ございません。少々、立て込んだ事情がございました」

己の人生を変えた美しいエルフを見た瞬間、身も心も軽くなるのがわかった。

「しかし、お一人で私のような下賤な人間と会ってるところを見られたら、アイシャ様の立場が悪くなるのでは？」

アイシャの姿を見た直後から人払いの魔法を使っておいたことなどおくびにも出さずと言う。

「ギュネイ、あなたに話があります。大切な、話です」

「……承知しました」

エメラルドグリーンの瞳に宿る強い意志を見て、ギュネイは恭しく頭を下げてから、麗しき王妃を自室へと招き入れる。アイシャはさすがに躊躇する素振りを見せたが、なにも言わず、部屋に入った。

「あなたやレオンは、なにを隠してるのです？」

「いきなりですね。私ではなく、レオン様にお尋ねになったのですか？」

「ええ。でも、誤魔化されました。お前はなにも心配する必要がないからと」

「あの方がそうおっしゃるなら、そのとおりなのでしょう」

墮竜殲滅作戦の決行直前まで、国民には情報を公開しない方針が固められていた。パニックになる可能性が高かったためだ。

王妃や王女にも秘密にすべきとレオンに具申したのはギュネイである。自分以外のことで美しい母娘の顔を曇らせたくないという、極めて個人的な理由によるものだ。

「そうね。レオンだけなら、私もここまで不安にはなりませんでした。問題はあなたですよ、ギュネイ」

「……？」

アイシャの言葉の意味が理解できず、ギユネイは何度も目を瞬かせた。

「あなたみたいな鉄面皮でもそういった顔をするのですね。……気づいてなかったのですか？ 最近のあなたには、なにか……そう、悲壮な覚悟が感じられるのです」

ギユネイは、本気で驚いた。自分では、普段と変わらぬつもりでいたからだ。また、目の前のアイシャがギユネイを気遣うような表情をしたことにも驚愕し、そして、歓喜した。

(アイシャ様が私ごととき男を気に掛けてくれた……！)

「み、身の程知らずな勘違いは許しませんよ、人間の魔術師。私はただ、日頃は腹立たしいくらいに冷静なあなたの様子が妙な点に違和感を覚えただけです。王妃として、この国になにかよからぬ危機が迫っているのではと心配しているだけなのです……！」

アイシャは僅かに耳の先を赤らめ、早口で言った。

「どちらもご安心くださいませ、アイシャ様。私とて己の分はわかまえております。そして……私たちが現在面している問題も、必ずや解決するとこのギユネイ、命にかけて誓います」

命にかけて。

心の底からの言葉だった。

(アイシャ様たちを救うのであれば、この命、惜しくなどありません。まあ、ついでに他の国民も助けてもいいですしね)

知らず、口元にニヒルな笑みが浮かんでいた。

「……なるほど、わかりました。信じましょう」

「おや、今日はずいぶんと素直に信じてくださるのですね？」

「あなたがいつもの憎たらしい顔に戻ったからです。あなたは確かに私の知る限りで最低の人物ですが、職務だけはきちんとしていました。その点のみは、王妃として評価してるのです」

「ありがたきお言葉」

「やめなさい、わざとらしい」

深々と腰を折る魔術師から、アイシャが忌々しげに顔を逸らす。が、その鮮やかな緑色の瞳がちらちらとギョネイを見る。

「……用は済みました。これ以上このような場所にいたくはありません。帰ります」

一瞬なにか言いかけたアイシャだったが、くるりと背を向け、部屋の出口へと向かう。軽く唇を尖らせた表情は、拗ねた子供を連想させた。

「ミス様も、よくそういった愛らしい顔をされましたね」

「なっ……!!」

娘の名を出された母が振り返り、険しい目つきで睨んできた。その瞳には明らかに、嫉妬の色が滲んでいる。

(アイシャ様にこんな顔をさせられた。我ながら、最高の人生でしたね)

満足する一方で、新たな欲望が中年男の中で沸き起こる。華奢な王妃の手首を握り、強引に抱き寄せ、唇を奪う。

「んっ、んっ、んっ……お、おやめなさい、この無礼者……ッ」

申し訳程度の抗いを見せたアイシャから顔を離し、エルフの宝石と讃えられる美貌を改めて凝視する。うっすらと上気した頬、なにかを期待したように潤む瞳、軽く開いた唇から漏れる熱い吐息、そのすべてがギュネイの股間を滾らせた。

「は、離して……今すぐこの手を離せば、先程の無礼は、特別に見逃してあげます。だから、早く……あっ」

先程以上に力ない抵抗をするアイシャを抱き締める。そして禍々しくいきり勃つ怒張をぐいぐいと押しつける。身長差があるため、アイシャの太腿にペニスを擦りつける格好だ。

「私が性根の腐った男だとお忘れでしたか？ この世のなによりも大切なアイシャ様を目の前にして、なにもしないでいられるとでも？」

「ダメ……ダメ、おやめなさいギュネイ……ああ、怒りますよ……あっ、ンンン……」

…！」

もう一度強引に唇を重ね、今度はぬらりとした舌も潜り込ませる。王妃の柔らかな唇はあっさりとな敬な舌の侵入を許してくれた。

甘い唾液をねっとり味わっているうちに、アイシャの手が、ギュネイの黒ローブを強く握り締めていた。

箝口令を敷いても、大がかりな討伐準備を進めてる以上、どうしても情報は漏れてしまう。エルフ王国内には日に日に、不吉な噂が広がりがつつあった。

無論、ギュネイたちもこうなることは予測しており、頃合いを見てレオン王自らが墮竜討伐について国民に説明する手筈になっていた。

「ギュネイ様、王妃様たちがいらっしやいました」

その説明を翌日に控えた夜、助手のナインが来客を知らせてくれた。ナインはアイシャと同じく二人の娘を持つエルフだが、少し前に夫と離婚していた。

「わかりました。……ナインも、今夜はもう帰っていいですよ。ご苦労様でした」

「はい。では、また明日、こちらに伺います」

アイシャよりもずっと歳上の美熟女は、落ち着いた仕草で頭を下げると、部屋を出

て行った。少し前まで、ギュネイの腕の中で激しく乱れてたのが嘘のように楚々とした所作だった。

「お待たせしました。それで、みなさま揃って、どういったご用件でございましたか？」

ナインがドアから出て行くのを確認してから応接間に入ると、エルフ王国の誇る三人の美女がソファに腰かけていた。

「……さっきの女はなんなのよ、ギュネイ」

最初に口を開いたのは、先日、一時帰国したミリスだった。

「ナインですか？ 昔から私の手伝いをしてもらってる助手ですよ。コザックの先輩に当たりますね」

さり気なくミリスの秘密の恋人の名を出し、第二王女を牽制しておく。

「こんな夜遅くまで仕事をさせてるのですか？」

次に問い質してきたのは、マリナだ。なにかを疑ってるようなまなざしだった。

「申し訳ないとは思ってますのですが、とにかく墮竜討伐の支度で人手が足りないのです、マリナ様。それに、これは彼女たっての希望なのです。……ナインには二人の娘がいることは？」

アイシャだけが頷き、マリナとミリスの姉妹は軽く首を横に振った。

「アンタ、まさかあの人妻を……」

「ミリス様、ナインは少し前に、人妻ではなくなりました。夫からいきなり離婚を宣告されたのです」

睨んでくるミリスを軽くいなし、事情を説明する。別に狙っていたわけではないが、このあとを考えれば、悪くない話の展開だったからだ。

「離婚？ あなたが原因ですか、ギユネイ……！」

娘たちよりもずっと鋭い視線を向けてきたのは、ナインと同じく二人の娘を持つアインシャだ。

「今宵、みなさまがここに来た事情とも関係があるので説明、いえ、弁明させていただきますが、ナインの元夫は、件の邪神教徒でした」

全員が息を呑むのがわかった。

「ナインにも、娘たちにも自分の信仰を隠していたようです。もちろん、私もまったく知りませんでした」

これは本当だった。もしナインの夫の事情を知っていれば、今回の墮童事件の様相は大きく変わっていたかもしれない。

「突然、ナインに離婚して欲しいと切り出した翌日にはもう、家から姿を消していたのだと聞きました。これはつい最近判明した事実なのですが、同様の例が、王国のあ

ちこちで発生しております」

調査で判明した範囲では、五十名ほどが突然、国から去っていた。ある者はナインの夫と同じく家族に別れを告げ、またある者は置き手紙だけを残して姿を消した。

「みな、少しずつ時期をずらしてたこともあり、彼らが邪神教徒という共通項を持っていたと気づけませんでした。言い訳にもなりません、相当慎重に信仰を隠し、綿密に練った計画を秘密裏に進めていたと思われます」

「そして別の信徒と合流し、墮竜に自らの命を捧げた……というわけですか」

マリナが眉をひそめながら言う。

「なるほど、だいたいのところはレオン王からお聞きになられたのですね？ それとも……アイシャ様から、ですか？」

「……両方、ですわ」

マリナが小さな声で答えた。

「ということは、例の取引についてもアイシャ様からお聞きになったわけですね？ その上で今、ここにいらっしゃる、と」

ギュネイの問いに、マリナとアイシャが同時に目を伏せた。二人の母娘は、先程から目を合わせていない。先日の一件がまだ尾を引いているようだ。

「あたしは納得してないわよ、ギュネイ」

この場で唯一、ギユネイを真正面から睨みつけてるのがミスだった。

「ホントはね、今すぐにでもアンタを殺してやりたいくらいなの。でも、まだ我慢してあげる。この国を守ったあとで、改めて殺してやるんだからっ」

「私としても、ミス様に殺していただけるのならなんの文句もございません。ただ、墮竜どもをどうにかしたのちも、私の命がまだあるかはわかりませんので……」

特に深い考えがあつての言葉ではなかった。愛する（少なくともギユネイにとって）は間違ひなく愛だった）母娘三人を前に浮かれていたせいで、本心がするりと出てしまったのだ。

「……アンタ、死ぬつもり？ 許さないわよ、そんな真似。死んで楽になんてさせてやらないから。その程度で償える罪とか思ってるわけ？」

低く、怒気を孕んだ声の主はミスだ。

「死なないで済むなら、もちろん、それが一番ですがね」

「ゆ、許しませんよ、ギユネイ」

「ミリスの言うとおりです。あなたの犯した罪は、一度死んだ程度では到底拭えないほど大きいのですから」

アイシャとマリナにも、睨まれた。無論、ギユネイにしてみればただのご褒美ではないのだが。

(ああ、至福の瞬間です。アイシャ様、マリナ様、ミリス様にここまで恨まれながら死ねる……なんと甘美な人生なのでしょう)

負の感情であろうとも、想い人の心に強く、深く己の存在を刻み込めた事実には、ギユネイの魂は震えた。

「ただでさえ醜い顔を、だらしなく緩めないでくれる？ どうせあたしたちの記憶に残せたのが嬉しいとか気色悪いこと考えてんだらうけど」

「ミリス様のご慧眼に感服いたします」

「悟ったふうな顔してるけどさ、それ、アンタの本心なわけ？ 違うわよね。もし、心の底から悔いのない人生だと思ってるなら、母様や姉様使って、あたしを呼び出したりしないもの」

「……」

ギユネイは答えない。心の底から満足してるのか、あるいはまだ生に執着があるのか、自分でも完全にはわかってないせいだ。いざ死に面した際、なにかしら悔やむ可能性も否定できない。

「それ見なさい、即答できないってことは、本気で死んでもいいなんて思ってない証拠よ」

ギユネイの沈黙を別の意味で解釈したミリスが薄い胸を張る。今日は三人とも平服

だったが、それが逆にそれぞれ美しさを引き立ててもいた。

「だ、だから……だから、あたしがアンタの未練になってあげる。身の毛がよだつくらいイヤだけど、あたし一人の犠牲でみんなが助かるなら、我慢できる。あたしだって王女だもの。その代わり、母様と姉様にはもう手を出さないと約束して」

ソファから立ち上がり、震えながらもギュネイに言い放つミスからは、確かに王族の姫としての威厳が感じられた。

（あ、あれ？ なにこいつ。どうしてそんな目であたしを見てるの？）

忌まわしき男から注がれる視線に、ミスは戸惑った。ギュネイのまなざしに、これまで一度も向けられたことのないものが含まれていたからだ。

だが、ミスはこの目に見覚えがあった。

（あたし、知ってる。母様や姉様を見るときの目だ）

気高い王族の女にだけ向けられてきた視線が注がれると理解した刹那、ミスの細い肢体がぶるりと震えた。おどましさではなく、歓喜によって、である。

（理由はわかんないけど、こいつ、今、あたしを母様や姉様と同列に見てる。ちゃんと、お姫様として認識してくれるのがわかる……！）

母とはあまり似てない容姿、姉のスペアとしてしか扱われてこなかった待遇で心に巣くったコンプレックスが強く刺激される。

「高貴なる者には、それに見合った義務があるわ。アンタへの生け贄って点は不満だけど、諦めてあげる。あたしを好きにしていよいよ、ギユネイ。元々、そのつもりだったんでしょ？ この、ケダモノ」

プライドを心地よく揺すぶられた王女は、無意識に唇を舌で湿らせながら言う。

（母様たちから話を聞いたときはどうしようかと思っただけど、これがみんな幸せになれる唯一の方法よね。あたし一人が犠牲になれば、母様も姉様も父様もコザックも国のみんなも助かるんだから）

自己犠牲の陶醉感も、ミリスを昂ぶらせた。

心の高まりは、目の前の憎むべき悪漢によって開発された女体にも変化をもたらす。小振りだが敏感な胸の突起や、股間のスリットに熱い疼きが生じる。何度も騷られた長い耳が、淫らな期待にうっすらと赤みを帯びていく。

（母様と姉様は色々屁理屈こねてたけど、要するにこいつを欲望で引き留めておけばいいんでしょ？ その程度の役目、あたし一人で充分だわ）

ミリスがこの場にいるのは、母と姉からギユネイが死ぬつもりらしい、あの人間の魔法使いにはまだまだ利用価値がある、レオンの役に立つ、だから王妃、王女として

も勝手に死なれては困る、どうかして説得しなければ、とあれこれ言われたためだ。
(姉様だけでなく、母様までこのクズの手にかかっていたのはショックだけど……相手が相手だから、しかたないわよね)

さすがにはっきりとは言われなかったが、母アイシャもまた、自分と同様にギユネに辱められてたのだとわかった。だが、意外なくらいに冷静に受け止められたのは、マリアと姉妹で痴態を晒した苦すぎる経験の影響と思われた。

「ミリス、なにを言ってるの。あなた一人だけを犠牲にはできないわ」
「お母様の言うとおりですよ、ミリス」

ミリスの突然の発言に、アイシャとマリナが慌てる。けれど、ミリスはもう、二人が発する言葉を素直に信じることはできなかった。母と姉から、はっきりと焦りが感じられたからだ。

(姉様がこいつにおかしな感情持ってるのはなんとなくわかってたけど、母様までってのは、驚いたわね)

母や姉同様、ミリスもギユネに対して説明しがたい感情を抱いているのだが、その事実を認める勇気はまだなかった。だからこそ、王族の義務という名目はありがたかった。

「よろしいのですか？ ミリス様の瑞々しいお身体に手を触れてしまったら、私は再

び邪悪な欲に囚われるかもしれない。墮竜とともに、永遠に闇に葬ったほうがミス様にとっても、この国にとっても最善の手ではありませんか？」

「ふん、アンタのその空々しい態度にはもううんざりしてんのよ。墮竜以上に腐った性根はバレてるんだから、とっとと本音を吐いたらどう？」

舌戦でギュネイに勝てるとはまったく思っていないミスは、王女に相応しくない言葉遣いで先を促す。いつもならば窘めてくるアイシャもマリナも、今回ばかりは口を挟まない。むしろ、なにかを期待したような目をギュネイに向けている。

「私の本音は、最初から一貫しております。敬愛すべきあなたがたを全員、私のものにするのです」

わかってはいたが、面と向かって言われると、それなりに衝撃的だった。言葉の持つ威力を痛感する。

「そして、同じくらい、あなたがた全員が永久に幸せであって欲しい、とも願っております。……ああ、言われなくともわかっておりますよミス様。私が消えるのが一番の幸せだとね」

黒ローブの魔術師が、ふう、と息を吐く。ミスはこのとき初めて、ギュネイの顔の隠しきれない疲労を見た。一晚中ミリスを組み敷き、無限と思われる精力で憐れな第二王女を凌辱したときでも、ここまで疲弊してはなかったはずだ。

「……墮竜討伐は、そんなに難しいわけ？ アンタでも？」

「難しいですね」

即答だった。だからこそ、深刻さが伝わった。

「ですが、安心してください。この命に代えても、あなたがた三人だけは絶対にお守りいたします」

ギユネイはよく「命」を口にするが、今回はこれまで聞いたどのセリフよりも重く響いた。本気で死を覚悟してるのだとわかった。わかってしまった。

「そう。なら、なおさらあたしは、ギユネイの生け贄になるわ。最低のクズだけど、仕事だけはこなしてきたアンタがそこまで言うなら、ホントに我が国は危機なんですよ。しょうね。……こないだの部屋に行けばいいの？」

ミスはゆっくりと立ち上がり、ギユネイを、母と姉を見ないようにして尋ねる。覚悟を決めたとはいえ、おぞましさが消えたわけではない。今、ギユネイの禍々しい顔を見たら、決意がくじけそうな気がしたのだ。

アイシャとマリナからも目を逸らしたのは、今、二人が浮かべているであろう表情を見たくなかったためである。

「わかりました。ミス様の、王女としての高貴な精神、このギユネイの澱んだ心にかと届きました。あなたの若く美しいお身体を穢すことと引き替えに、必ずやこの

国を救うと誓いましょう」

「約束よ、ギユネイ」

「はい。今夜一晩かけて、ミリス様のもう一つの純潔をいただくこうと存じます。ミリス様だけは、まだ、初めてを奪えておりませんからね」

「え？」

ギユネイの言ってる意味が、すぐには理解できなかった。

(初めて? あたしの?……あっ)

もう一つの純潔がなにを指すか理解した瞬間、ミリスは無意識に両手で尻を隠していた。ショーツの奥でアヌスがきゅっ、と窄まるのがわかる。

「ご安心ください。私は絶対にあなたを傷つけたりなどしません。初めてでも痛くならず、しかも気持ちよくなれる手法を確立してあるのです」

(……?)

言い回しに不自然さを覚えたミリスが、ギユネイを見る。そして、すべてを察する。ギユネイの視線の先には、頬や耳を赤らめ、ソファの上でもどもども腰を揺する母と姉がいたからだ。

(まさかこいつ、母様と姉様のお、お尻まで……!?)

刹那、ミリスの中でとある感情が広がった。

排泄器官を貪るギユネイへの嫌悪ではなく、不浄の穴まで穢されたアイシャとマリナへの憐憫でもなく、これから自分を待つ恐ろしいアナルセックスへの恐怖でもなかった。母と姉への、嫉妬だった。

「実は以前、美容のために開発した術を、アイシャ様、マリナ様に試していただいたのです。その副産物として偶然、後ろの穴を傷つけずにほぐす技術も会得したのでですよ」

いけしゃあしゃあと言い放つギユネイの口元に浮かぶ小さな笑みの意味を悟り、ミスはさらに不機嫌になる。ミスに話しかける体^{てい}で、アイシャとマリナを誘っている^{てい}とわかったからだ。

「余計な気は回さないでちょうだい。王族の女が痛みくらいで根を上げるとでも？ほら、さっさとあたしを穢しなさいよ、ケダモノ！」

「承知しました、ミス様」

率先して部屋を出て行くこうとするミスに、ギユネイもようやく立ち上がる。だが、ミスの狙いどおりの展開とはならなかった。

「ま、待って、ギユネイ」

「お待ちなさい、ギユネイ」

アイシャとマリナも一緒に立ち上がったからだ。

母娘三人が、邪悪な魔術師の見え見えの罫に嵌まった瞬間だった。

(ついに、ついにこのときが来ましたか。興奮のあまり、意識がどこかに飛んでいてしまいそうですよ)

ギュネイの人生そのものである王妃アイシャ。二人の美しい娘たち。この三人を同時に貪ることこそが、ギュネイの最大の念願だったのだ。

夢にまで見たシチュエーションの到来に、さしものギュネイも冷静さを保つのが精一杯だった。激務による疲労など、もはやまったく感じない。

「ミリス様は、そのこのベッドで四つん這いになってください。私に、その形よいお尻を向けるようにして」

普段は実験室として使ってる部屋に母娘を連れて来たギュネイは、次女に屈辱のポーズを指示する。

「ふ、服はこのままでいいのね？」

「ええ、かまいません。ただ、汚れてしまった場合、ここから帰る際に少々困ったことになるかもしれませんね」

「素直に脱げて言いなさいよ。アンタのその回りくどさ、ホンット、イラつくわ」

気丈なふりをしているが、声が僅かに震えていた。それでもミスはそれほど躊躇することなく、服を脱いでいく。一度、姉とともに辱められた経験があるせいかもしれない。

「申し訳ございません。己の醜い本性を少しでも隠そうという、私なりの処世術なのですよ」

第二王女の身体をねっとりとしつと視姦しつつ、ギユネイも着ていたものをすべて脱ぎ捨て全裸となった。若い頃と変わらぬ量を維持する圧倒的な筋肉の鎧、獣を彷彿とさせる黒々とした体毛、股間で禍々しく反り返る巨大なペニス露わとなる。

「おやおや、そこまで注目されると恥ずかしいですね。エルフ族と違って、優美さのかけらもない身ですので」

三人の高貴な美女から注がれる視線に剛直が跳ね上がり、びたびたと下腹部を叩く。「マリナ姉様、なにしてるの？」

母娘の中で次に動いたのは、マリナだった。妹に続いて服を脱ぐと、自身も横たわった経験のあるベッドに上がる。

「可愛い妹にだけ、つらい想いはさせられませんわ。……ギユネイ、わたくしに対する辱めも許します。その代わり、ミスへの責め苦を軽減すると約束なさい」

「そ、それなら、母親である私が」

マリナに少しだけ遅れて服を脱いだアイシャが立候補したが、娘たちに断られた。一見すると美しい母娘愛だが、三人のあいだには明らかに別の感情や思惑が作用していた。

(アイシャ様に似たのか、ミリス様もなかなか独占欲の強い方ですからね。マリナ様は、アイシャ様に対抗しての立候補、といったところですか)

先日の、アイシャとマリナの競い合うような痴態を思い出し、剛直がまたもびたんと下腹を打つ。

「では、こうしましょう。アナルセックスの先輩であられるマリナ様は初心者の方のミリス様に色々教えてさしあげてください。アイシャ様は、お二人のサポートをお願いいたします」

先にマリナを仰向けに寝かせ、その上にミリスを四つん這いにさせる。アイシャには、自分の判断で娘たちの補助をして欲しいと伝えておいた。

(さて、始めますか。アイシャ様とマリナ様の実験データを使い、さらに強力になった我がスライムの威力、たっぷりと味わってもらいますよ、ミリス様)

あまりの屈辱に、ミリスの目にはうっすらと涙が滲んでいた。全裸で四つん這いと

なり、忌々しい男に尻を突き出す羞恥は、まだ耐えられる。今回が初めてではないからだ。

(母様と姉様の前でなんて……イヤ！ ギュネイのバカ！ あたしだけ慰み者にすればよかったのに！)

姉のマリナとは、互いに痴態を晒し合ったこともある。こうして姉妹で向き合うのも二度目だ。

問題は、どうやらアヌス責めの経験がないのが自分だけ、という点にあった。先程ギュネイが口にした「先輩」「初心者」「教える」といったワードが、ミリスの劣等感をひどく刺激するのだ。

(あたしをあれだけ辱めたくせに、褒めたくせに、求めたくせに、なによ、結局は母様と姉様を選んだんじゃないのよ！ バカ！ クズ！……あっ)

ギュネイを睨んでやろうとしたそのとき、憎たらしい男が耳元に口を寄せ、ミリスにだけ聞こえる大きさの声で、こう囁いた。

「大切にとっておいたミリス様の初めてを奪えると思うと、歓喜のあまり、どうにかなってしまいそうですよ」

(ま、またこいつ、白々しい嘘を……！ あ、あたしだってバカじゃないんだからね、その程度のお世辞で、誤魔化されたりなんてしないわよ！)

腹を立てる一方で、なんだかんだと自分の心を理解してくれているのだと喜んでしまふ。利用されているだけとわかっていても、この人間を許したくなるのだ。

「ミリス様の大事な場所を傷つけるわけにはまいりませんので、まずはこれを使わせていただきます。アイシヤ様、マリナ様にも悦んでいただけただけ、自慢の一品でございます」

「わ、私は悦んでなどいません、訂正なさいっ」

「そうですね、勝手な発言は許しませんよ、ギュネイ！」

母と姉が同時に異議を唱えたのが、逆に信憑性を増していた。

(なにをされちゃうの。あたし、どうなっちゃうの……!?)

これから始まる汚辱のショーに身構えた直後、ひんやりとしたものがミリスの臀部に触れた。

「ひあっ!? なに、やっ、イヤ、やあぁッ！」

振り返ると、ピンク色のスライムがうごうごと尻を這い回っていた。

「ご安心ください、ミリス様。最初はひんやりしてますが、すぐに体温と同じになります。害も一切ございません。……暴れると危険ですので、マリナ様、よろしく願いいたします」

「わ、わかりましたわ」

ギユネイに指示されたマリナが、仰向けに寝たまま、妹の上体を抱き寄せてきた。密着する肌、互いのあいだで押し潰れる乳房の感触が、あの淫夜の記憶を呼び起こす。「我慢してちょうだい、ミリス。冷たいし気持ち悪いのはわかるけど、本当に安全だから。力を抜いてたほうが楽よ」

耳のすぐ側でマリナが言う。セリフの内容よりも、耳に当たる姉の吐息の熱さがミリスには気になった。

(ううん、息だけじゃない。姉様の身体全体が熱くなってる。汗ばんでる。そ、それに……あっ、これ、おっぱいの先っぽ、こりこりしてる……！)

血を分けた姉が、アナルヴァージンを奪われようとしている妹を前に発情していた。(違う。姉様、羨ましがってるんだ。ホントは、自分がギユネイにいじめられたって思ってるんだ……)

自分がマリナを羨ましがらせた経験などほとんどなかったミリスにとって、この事実は大きかった。姉に対して抱く優越感が、スライムへの嫌悪を上回る。

「ン……あっ……ん……はっ、はあ、んはあ……」

一度受け入れてしまえば、あとは早かった。ヒップ全体をまさぐるように蠢くスライムがまるで愛撫に思えてくる。ただし、連想した愛撫の相手が恋人ではなく、ギユネイだった点がミリスを困惑させる。

(どうして。なんでコザックじゃなくてこいつなのよ……あたしのバカ！)

「いかがですか、ミリス様」

頭を振ってギュネイの幻を追い出そうとしたタイミングで、本物が声をかけてくる。
「うっうるさいわよギュネイ……ン……はああ、き、気持ち悪いに決まってる、でしよ……ああ……ふっ……んっ……ああン」

知らず、小振りな尻が左右に揺れていた。漏れ出る吐息にも、甘みが帯び始める。

「ああ……ミリス……」

ベッドの傍らでは、次女の浅ましい尻振りを目の当たりにしたアイシヤがっらそうに俯く。だが、娘に向けられるまなざしには、母としての悲しみ以外のかなかが混ざっていた。

「あっ、な、なにこいつ、どこに向かって……あっ、やだ、ダメ！ ダメーっ!!」

頃合いと判断した魔術師に操られたスライムが、ついに乙女の裏の窄まりへの侵攻を開始した。皺の数を数えるように菊穴の周囲を這い回られるたびに、全身に鳥肌が立つ。

「大丈夫よ、ミリス。落ち着いて。気持ち悪いけれど、力むと余計につらいわ。わたくしを信じてちょうだい」

マリナが優しく囁く。妹を気遣っているのは事実だろうが、僅かに滲む優越感が、

ミスには面白くなかった。

(姉様にできたのなら、あたしだってえ……でも、ああ、これ、怖い……お尻でなんて、やっぱり無理い！)

排泄するための器官へスライムに潜り込もうとされて、平気でいられるはずがなかった。けれどこのおぞましい魔物を操ってるのは、ミリスの女体を本人よりも、恋人よりも知り尽くした男だった。

「うっ、ふっ、くあぁっ……あっ、んっ……やっ……あああぁ！」

くすぐりたい、とも少し異なる感覚がゆっくりと、けれど着実にその一点に迫る。生物としての反射で肛門が締まるが、柔らかなスライムはじわじわと狭穴の中へと侵入してくる。まるで、液体が染み込むようだった。

「いかがですか、痛くはございませんか？」

「ふっ、ふっ、んふううう……ああ、き、気持ち悪い……やだ、これ、やだぁ……うひゃあぁ!？」

徐々にガードを崩されたアヌスに、ぬるん、とスライムが潜った。咄嗟に括約筋が抵抗するが、柔らかく弾力性に富んだ魔物はまるで苦にせず、王女の直腸を逆流してくる。痛みがないのが、逆に恐ろしかった。

「ご安心ください。こいつは緊張を和らげる成分を含んだ体液を分泌します。腸はす

ぐに吸収しますから、あつと言う間に楽になりますよ」

説明するギュネイの声に滲む欲望に、ミスはかちんと来る。が、墮竜騒ぎが起きる前のギュネイが戻ったと安堵してしまった己に気づき、慌てる。

(違うから！ 絶対に違うから！ あたしは別に……ひい!?)

僅かな動揺を衝いて、スライムが一気に腸内深くに潜った。通常は絶対にあり得ない異物の逆流感覚に、華奢な肢体がぎくん、と強張る。全身の鳥肌は増すばかりだ。

「無事に収まったみたいですので、ここから処置を開始します。アイシャ様やマリナ様にも気に入ってもらえた、自慢の美容法でございますよ、ミス様」

そのときの感覚を思い出したのか、視界の片隅でアイシャが、自分のすぐ下のマリナが、同時に頬を赤らめ、尻を揺すった。

(あの母様と姉様がこんなふうになるなんて、いったいどんな……あああ!)

ミリスの疑問は、すぐに解決した。己の身を以て知ってしまったからだ。

排泄器官に侵入したスライムがもたらすおぞましくも甘美な背徳の愉悦に、エルフの美姫が大きく仰け反る。

「はっ、あっ、はうううっ!? ちょっ、あっ、んんん！ なんで、あっ、イヤ、動いてるっ、気持ち、悪い……やだやだ、これ、やだぁっ!!」

小振りなヒップを激しく振って無礼な侵入者を追い出そうとするが、魔術師に操ら

れたスライムは催淫効果のある体液を分泌しつつ、うねうねと蠢く。それは間違いない、腸粘膜に媚薬を塗り込むための動きだった。

「ギュネイ、お願いよ、あまりミリスをいじめないでちょうだい。なんなら、私が身代わりになっても……」

滑らかな肌に汗を滲ませた娘の姿に、王妃が言う。

「いじめる？ まさか。このギュネイ、たとえ天地が逆転したとしても、あなたがたに害することなどあり得ません。それに……アイシャ様もご存じのはずです、スライムが与えてくれる忘我の快楽を」

「……っ」

二児の母はまるで少女のように羞じらいに俯くと、再び口を嚙んだ。

「あっ、あっ、なんで、どうしてえ……気持ち悪い、のにお腹の奥、ぞくぞくってえ……うあっ、あっ、んっ、熱い……痒い……ああっ、お尻、変になってるう……ふひっ、あっ、アア……ッ」

何日も便通がないときの数倍もの苦しきがあるのに、それが気にならなくなるほどの奇妙な快感も生まれていた。深々と怒張で貫かれ、子宮を揺さぶられているときに得られる法悦に近い悦びだった。

また、同時に肛門付近にも未知の感覚が発生する。痒みにも似たもどかしさに、ミ

リスの尻が勝手に左右に揺れる。

(お腹もお尻も、変っ……あんなに気持ち悪かったのに……やだやだ、このままじゃあたし、またこいつに負けちゃう、母様と姉様の前で、おかしくされちゃう……！)
ミリスを襲う切なさを承知しているのか、スライムが思い出したようにアヌスをゆっくりと出入りする。そのたびに甘い痺れが脳天まで駆け昇り、ミリスは嬌声を漏らしてしまふのだ。

「はあああっ、ダメ、ダメえ！ それ、ホントにやめてえ……アーツ、アーツ！」

もはや認めざるを得なかった。低級な魔物によって排泄のための穴を、腸内を撈られ、同じ王族である母と姉の目の前で、背徳の肛悦に打ち震えている事実を。

「やらっ、あっ、くっ、うっ、うあっ、なにか変っ、おかしいのっ……あっ、ギュネイ、ねえ、お願い、お願いよ、どうにかしてっ……こいつ、なんとかして……ッ」

かつてのミリスであれば、見下している人間相手に許しを請うことに激しく抵抗しただろう。しかし、ミリスはそれが無駄だと知っている。魂と肉体に、刻み込まれてしまっているのだ。

「承知しました、ミリス様。ですが、具体的にはどのようなようにいたせばよろしいのでしょうか？」

(こいつっ、わかってて……あたしが今、どうなってるか全部わかってて、まだ辱め

るつもりなんだ……ああっ、最低……最悪……こいつ、大嫌い……!!)

ミスは、スライムを抜いて欲しいわけではない。スライムによって掘り起こされてしまった禁断の疼きを鎮めてもらいたいのだ。

「うっ、うるさい……全部わかってるでしょ!? あ、あたしのことを大事に想ってるなら、それくらい察しなさい、クズ……アアッ、ダメ、つらいの、切ないの、お尻が熱くて切ないのよお! ギュネイ、ギュネイい……っ!」

この場ではギュネイしか知らなかったが、今回使われたスライムは、以前アイシャとマリナを辱めたものよりも催淫効果が強化されていた。母と姉でデータをとった淫らな魔物にアヌスを犯されたミスが、泣きながら仇敵に許しを請う。

(お願い、早くして……早く楽にしてっ。もう無理、これ以上堪えるなんて、絶対にできないんだからあ!)

はしたなく尻を振る王女の願いがようやく届いた。スライムたちが、入ってきた狭洞目指して移動を開始したのだ。

「おひっ、ひっ、あっ、待って、あっ、んああっ、これダメ……やめてギュネイい……ああっ、イヤ、漏れちゃう……アアアッ!」

固体と液体の中間の物体が腸内から肛門を目指す。まさに、排泄と同等の感覚だった。否、排泄時にはあり得ない妖しい愉悦が女体を震わせ、性交時とよく似た声を出

させる。

(気持ちイイ……すっごくイイっ！ でも、これって……ああっ、やだやだ、漏れちゃう、漏らしながらイクなんて絶対にダメーっ!!)

スライム以外のものまで排泄する可能性に思い至り、第二王女は慌てて尻穴に力を込める。だが、初めて経験する法悦に蕩けた括約筋の反応は鈍く、スライムの勢いに抗えない。

「ギユネイ、お願い待って、少し待って！ 出っちゃうから、あたし、あたし……!!」
肛門付近までスライムが迫ったところで、ミリスは本気で哀願した。子供のよう泣きながら、憎むべき人間に訴えた。

「ふふふ、ご安心を。スライムはすでに、ミリス様の排泄物をすべて取り込み、消化しております。だから我慢は不要です。思い切り、思う存分、ひり出してくださいます」

ギユネイがこう告げた直後、出口近辺まで押し寄せていたスライムが一際激しく蠢いた。これが最後の一押しとなり、ミリスはついに決壊を迎える。

「らめっ、出る、出るの、出ちゃうっ……ひいっ！ らめっ、見たら、らめええっ！ アアアッ、アアッ!!」

ぐん、と高く掲げた尻から、ピンク色のスライムがぶちゅぶちゅと音を立てながら

嘔き出してきた。一気にではなく、少しずつしか排出されないのが、ミスには逆につらかった。エルフの王族の娘が、母と姉、そして人間の前で疑似排便するのが、恥ずかしくないわけがないのだ。

「あああ、やあ、あ、見るな、見るな、見るな！ はうう、あ、ああ、こんなって、こんなってえ……ひい、ひい、はひい！」

たとえ漏らしているのがスライムだけだとしても、ミリスの感じる汚辱は一緒だ。

しかし、ミリスをより困惑させてるのは、排泄するたびに女体を襲う、凄まじい愉悦のほうだった。

（気持ちイイよお……出すたびに、お尻がぞくぞくするう……おトイレの、何百倍も気持ちイイ……ああん、お尻、溶けるう……ギュネイに犯されてるときみたいに、お腹の奥が、きゅんきゅん疼いちゃう……っ）

解放感と、肉悦。そのダブル攻撃に、ミリスは屈した。蕩けた。墮とされた。

「あ、イク……イッちゃう……ダメなのに、イク……お尻、イク……イッく……ふううううっ!!」

スライムを完全に排出した刹那、ミリスは生まれて初めてのアナルアクメを迎えた。無毛の秘裂から噴いた絶頂潮で姉を濡らしたことに気づかず、ケダモノのような四つん這いの格好で、背徳の頂に達する。

(イツちゃったあ……あたし、お尻で、モンスターなんかイカされちゃったあ……
ああ、最低……最低だよお……でも……でも……お)

ぼろぼろと溢れる涙が、悲しみによるものなのか、あるいは喜びのせいなのかわからぬまま、ミスはなかなか引いてくれない肛悦の余韻に震え続けた。

ぽっかりと空いた裏門がひくひくと物欲しげに蠢いていることも、そこにスライムよりもずっと凶悪なモノが迫っていることにも、ミスはまだ気づいていなかった。

(ミス……あなたもわたくしと同じ、絶望の沼に沈められてしまったのね……)

己の上でぶるぶると痙攣する妹の浅ましくも妖艶な姿に、マリナは胸を痛めた。同様の恥辱を経験したマリナには、今のミスの気持ち痛みくらいに理解できた。死にたくなるほどの絶望と、それを上回る快感、そのどちらもが。

(わたくしも初めてギユネイに不浄の穴を責められたときは、頭が真っ白になったもの。純潔を守るためにと堪えたのに、この男は約束を破って……)

決して許されず、叶うことがないと知りつつも、大切な人のために守り続けた乙女の純潔を散らされた怒りが甦る。けれど、望まぬ開発を続けられた若い女体は、別種族の禍々しい男根の感触を思い出し、とろとろと秘蜜を垂らしてしまう。

(羨ましいわ、ミリス。少なくともあなたは、初めてを好きな人に捧げられたのだから。……あっ)

まだ震えが止まらないミリスの頬を優しく撫でていた手が止まる。妹の背後に迫る影を見たせいだ。

「待ってギュネイ、その子にはまだ」

同じく、ギュネイの狙いに気づいたアイシャが弱々しく制止したが、無論、なんの役にも立たない。

「ふえ？ ギュネイ？ アンタ、なにを……え？ え？ え……!?」

一番最後に、ターゲットであるミリスが己に迫る危機に気づいた。だが、遅すぎた。「それでは、ミリス様のこちらの初めてもちょうだいたします」

エルフ族の男ではあり得えない硬度と熱と反りを持つペニスが、ミリスの菊穴にめり込んだ。小柄なミリスの未開通の窄まりに対し、ギュネイの肉鉗は太すぎに見えたけれど、亀頭はゆっくりとミリスのアヌスに沈んでいく。

「ひっ、ひいっ……なっ……はっ、はおっ……やめ……あっ、なん、れえ……」

恐らくはまだ先程の余波が残ってるミリスが、困惑の表情で背後を振り返る。いきなりの挿入を受け入れてしまっている己の身体に驚いているようだ。

「イヤよ、イヤっ……アンタになんか、挿れられたくない……お尻でなんて、繋がり

たくないのにい……んあっ、あっ、入るう……ダメ……ひやめええ……！」

懸命に力んで異物を押し返そうとしているのだろうが、肛交ではむしろ逆効果となることをマリナはよく知っていた。力を入れると、排泄口が開くのだ。

「ああ……これはいいですね。まるで、ミリス様が私を受け入れてくれてるようですよ」

「誰が……誰がアンタなんか、おお……ほっ、はお……っ！」

恐らくはあのスライムの分泌液が潤滑油となっているのだろう、ギュネイの勃起がさらにアヌスの奥に潜る。

（わたくしたちを異常なくらい崇めてるギュネイに限って、ミリスのお尻を傷つけるような真似はしないでしよう。つまり、いきなり全部挿れても平気な状態まで、この子の後ろはほぐされてしまったのね……）

かつて、清らかな身のままアヌスを調教された過去を持つマリナの目に、妖しい光が宿る。

「ミリス、息を吐いて。怖いでしょうけど、力を抜いたほうがいくらかは楽になれるわよ」

マリナは妹をそっと抱き寄せ、姉として、先達としてアドバイスを送る。触れた肌の熱さと汗の量に、ミリスが感じている快樂の大きさが容易に推測できた。

(ギユネイ、優しく、優しくですよ)

ミリスの肩越しに、自分たち姉妹、母娘を淫らな地獄に叩き落とした張本人を見上げ、視線でさらなるインサートを促す。

「ね、姉様ぁ……あっ、ふっ、ふっ、ふうう……ンンン！」

初めての肛交への不安からか、ミリスがしがみついてくる。まだ仲のよかった頃の記憶が脳裏をよぎるが、擦れ合う乳首から生じる鋭い刺激によって、先日の姉妹揃っての痴態の記憶で上書きされてしまう。

(また、こうしてミリスと二人一緒に犯されるだなんて。それに、今回はお母様までも……あっ)

がたがたと震えるミリスをしっかりと抱き止めながら、目だけを動かしてアイシヤを探すが、見つからない。

「お願いよギユネイ。私の可愛い娘を、いじめないでちょうだい。あなたが欲しいのは私なのでしょ？」

アイシヤはいつの間にかベッドに上がり、ギユネイの背後に回っていた。ミリスを貫くのをやめさせようとしているのか、ギユネイの逞しい肩に手を乗せていたが、愛おしい男に寄り添う女のようにも見えた。

(お母様にはお父様がいらっしやるのに……)

ファザコン長女の、母親を見る目が陰しくなる。

「ひっ、やっ、あっ、太い……これ、太すぎるう……ああ……それ以上、来ないで……あたしの中に、もう、入らないでえ……アアア！」

マリナの腕の中で、ミリスが悲鳴を上げた。どうやら、ギユネイのイチモツがついに根元まで挿入されたようだった。

「おお、なんと……なんと甘美な穴なのですか。これが、これがミリス様のもう一つの純潔……素晴らしい締めつけです……最高の肉穴でございます……！」

「だ、黙れ……ああっ、ダメ、挿れたまま、ぐりぐり、らめえっ!!」

貫通したアヌスをほぐす、あるいは拡げるためか、ギユネイが腰で円を描いた。スライムの分泌液が立てる水音と、ミリスの声が部屋に響く。

「ミリス、息を吐いて。力を抜いて」

「無理、無理い！ んあっ、みちみち、するっ、あたしのお尻、壊れちゃう……んひっ!? ね、姉様!？」

恐らくは痛みではなくショックによるものだろうが、ミリスがぼろぼろと涙をこぼす。そんな妹を見ていられなくなったマリナは、少しでも気が紛れればと、ミリスの股間に手を伸ばす。

「つらかったら、こっちに集中して」

昔と変わらぬ無毛の恥丘を撫で、その先の縦溝に指を這わせる。

「姉様、やめて、なんで、どうしてえ……あっ、イヤ……んんん！」

かつて互いに擦り合わせた妹の陰唇を、今度は自らの意志でまさぐる。

(凄く、濡れてる……。やっぱり、気持ちよくさせられてしまったのね。こんなふうに使ってはいけない穴をいじめられて、嬲られて、でも、望まぬ快感を……)

己の女陰よりも薄く、小さく、まだいたいけさすら残るラビアを、優しく、丁寧に愛撫する。

「やあぁ……あっ、ダメ、んっ、ああん、そこ、触るの、やあ……やん、やんっ」

腕の中で身悶えるミリスの声が、徐々に甘みを帯びてきた。同時に指を濡らす秘液の量も増す。最初は一本だった指を二本にして、より強く陰唇の合わせ目をいじる。同性だからこそ、デリケートかつ的確なタッチだった。

「おお、ミリス様の中がほぐれてきましたね。初めてのアナルセックスに戸惑うミリス様を氣遣うマリナ様の姉妹愛に、このギュネイ、感動いたしました」

ミリスを挟んで相対するギュネイと目が合った。

(白々しいことを。その顔のどこに感動があるのですか。わたくしとミリスの惨めな姿に昂ぶってるだけではありませんか)

セリフとは裏腹に、醜い欲望を滲ませた牡の視線がマリナにも注がれる。裸身の太

部分がミリスで隠されてるとはいえ、羞恥がないわけではない。

ギユネイはミリスの裏門を深々と抉ったまま、欲望に澱んだ目をマリナの顔に向けてくる。

「な、なにを見てるのです。あなたのような者の視線に晒されるだけで、不愉快ですっ」

口ではそう言いつつも、ギユネイに視姦されたマリナの肢体に変化が生じた。乳首がむくりと隆起し、ヴァギナが愛蜜で潤む。なにより、アヌスの切ない疼きがさらに加速していた。

物欲しげにもぞもぞ尻を動かしながら、ミリスへの愛撫を強める。熱く潤む柔らかな窪みに指をあてがい、膣穴にゆっくりと沈めていく。

「ひっ、ダメ……姉様、姉様あ……あああ、指、イヤあ……あっ……ああっ」

首を左右に振って拒絶の言葉を吐くミリスだが、少なくとも媚壁は姉の指を完全に受け入れていた。指を締めつけてくる膣壁の蠢きに、マリナも妖しい興奮を覚える。

「マリナ様がミリス様のオマ×コを……ッ」

けれど、最も漲ったのは、ギユネイだった。ミリスの腰を力強く引き寄せ、ついに抽送を開始する。

「はおっ、おっ、あおお……っ！ らめっ、抜くの、イヤ……なんか、出ちゃいそう

……ひっ、ひいっ！ ああっ、また入ってくるう！ あーっ、んぎっ、ひっぎい……うううううんん!!」

勃起がゆっくりと、肛門を出たり入ったりを繰り返す。緩やかな速度ではあるが、ペニスが抜け落ちる寸前のところまで引かれ、そこからまた深々と突き刺される振幅は、あまりに凶悪だった。

(ひどい……初めてでこんなふうにお尻を、アナルを嬲られたら、堪えられないわ。ああ、可哀想なミス……あなたのお尻も、わたくしと同じように惨めに躡けられてしまうのね……)

排泄と酷似した解放感と、直腸を逆流してくる圧迫感に交互に襲われるアナルセックスの恐ろしさは、この場の誰よりもマリナが知っていた。知らされてしまった。

「姉様、姉ひゃまあ……あああっ、こ、怖い、あっ、あっ、オチン×ンが、おひりに、お腹の奥にい……ひあああっ、ダメっ、抜くの、やあっ！ 漏れちゃう……あた、あたし、粗相、ひちゃう……はほおオッ！」

「平気よ、大丈夫よミス。ギュネイがスライムで綺麗にしてくれてるから、安心なさい。お尻ではなく、前を意識して。わたくしの指に集中なさい」

かつての自分が通った淫らな道を辿る妹を少しでも楽にさせようと、マリナは膣内に沈めた指を動かす。優しく、丁寧に、同じ女だからこそわかる絶妙なタッチで、甘

い愉悅をミリスに与えていく。

(ギユネイ、激しすぎですよ。ミリスは初めてなのですから、もっと気を遣いなさいな)

膺壁越しにでも指に伝わるギユネイのピストンに、知らず、生唾を飲み込む。

「あひっ、あっ、んあっ、はひっ、あっ、ひゃめ……んん……お尻、熱いのお……ああっ、これ、変……気持ち悪いのに、気持ち、イイ、かもお……ああっ、なんれえ……はおオッ！」

気づけば、ギユネイの腰はリズムミカルに躍動し、第二王女のアヌスをほじっていた。ときおり空気が漏れ出る音が生じ、そのたびにミリスは羞恥に泣いた。

「いいのよ、ミリス。私も……同じように乱れてしまったのだから」

娘の悲しみを少しでも和らげようと、アイシャが告白する。しかし、先程よりもギユネイの背中に密着したエルフ王妃の目には、隠しきれない羨望の色があった。

(お母様は、また……っ)

ギユネイを止めるどころか、人間の魔術師の背中に勃起乳首を擦りつけてるアイシャの顔は、娘たちの前で母が見せていいものではなかった。

だが、マリナはもう知っていた。母の再来と謳われる己もまた、今、間違いないアイシャと同じ淫らな表情を浮かべているだろうことを。

「ふふふ、だいぶこなれてきましたね。それでも、私の愚息を押し潰さんばかりの凄まじい締めつけですよ、ミス様」

「アンタ、のが、太すぎんの、よお……あおっ、んひっ、ぬ、抜くとき、イヤ……アッ、それ、怖いのお……ヒイイ！」

ギユネイもミスも、全身汗だった。二人の汗を受け止めるマリナの女体が、切なげにシートに皺を作る。

(ミリスのオマ×コ、凄くうねうねしてる。それに、顔が蕩けてきてるわ。知ってしまったね。ギユネイに教えられてしまったのね、お尻の……後ろのオマ×コの味を。王族の女が絶対に覚えてはならない悦びを)

ミリスの蜜壺を攪拌しつつ、反対側の手を自分の股ぐらに潜らせる。そこは、妹の膣に負けないほどの愛液で濡れていた。

「ミリス、我慢しないでいいのよ。快感に身を委ねても平気なの」

マリナは軽く胸を反らし、ミスと乳首を擦り合わせる。前回よりも甘い快樂に、姉妹は同時に嬌声を上げた。

(姉様の乳首、こりこりい……ああっ、思い出しちゃう、こないだの、全部思い出し

ちゃううっ！)

自分と同じくらいに浅ましく尖った乳首に擦られた刹那、姉妹揃って恥を搔いた淫夜の記憶が甦った。そしてこれがきっかけとなったのか、アヌスから広がる背徳の肉悦がさらに増大した。

「ううっ、んうううっ、深い、深ひゅぎいっ！ あああっ、ダメなとこまで、来てる、届いひゃってるう！」

違和感はまだ根強いものの、それを超える気持ちよさがミリスの理性を侵蝕する。

「姉様 あ……ああっ、乳首も、オマ×コも、お尻も、全部、全部イイの、よくなっちゃってるのお！ お尻がおかしいの、ダメなのに、ギュネイにはじられるの、たまんないのお……はおッ、おッ、ほおおおんッ!!」

肛交が生み出す底なしの快樂に、ミリスは涙と涎を垂れ流す。そんなミリスの反応を見て、ギュネイはいよいよ遠慮なしの抽送を繰り返して来る。これまで幾度もミリスを望まぬアクメに沈めた、あの本気の腰使いだった。

(こいつ、最悪……っ！ あたし、お尻は初めてなのに、こんな激しく……奥まで挿れて、抜けるぎりぎりまで引くなんて、最低のクズよ！ これ、凄いのに……我慢なんて、絶対にできないやつなの……!!)

アナルセックス単体、ギュネイ単独ならば、まだ堪えられたかもしれない。しかし、

すでに女として開発されている秘口をまさぐられ、勃起乳首を刺激されては、抵抗は無駄だった。

(ううっ、姉様の指も、気持ちイイ……あたしの一番弱いところばかり、ぐりぐりしてくるう……ああん、前も、後ろも、おっぱいも、全部イイ……身体中、たまんない……！)

実の姉妹で肌を擦り合わせる行為も二度目のためか、マリナの動きにも躊躇が少ない。前回よりも強く、大胆にしこった乳首を押しつけながら、ミスと己の女陰をまさぐり続ける。

「ミス、ミス……ああ、あなたのオマ×コ、凄くきつくて、ぬるぬるよ」

美しき第一王女が卑猥な言葉を口にしつつ、ミスに熱っぽい視線を注ぐ。そこには欲情のみならず、明確な嫉妬も含まれていた。

(あの姉様が、自分でいじってる……それも、あたしを羨みながら……！)

姉に対し強い劣等感を持つミスにとっては、マリナから注がれる視線も精神的な愛撫だった。排泄器官での背徳すぎる性交への嫌悪が薄れ、肉悦の純度が急速に上昇する。

「もお、もお、どうでも、いいっ、お尻、突いて、挟ってえ！ ああぁっ、たまんらいいっ、ほじられるの、ぎもちイイッ！ もっとよ、もっとほじってよおっ！」

恋人の存在も、この場に母と姉がいることも忘れ、ミリスは叫んだ。己の後ろのヴァージンを奪った男に、より激しいピストンを要求した。

「承知しました、我が姫よ……！」

口元に歪んだ笑みを浮かべたギユネイが、ミリスの求めに応じて抽送の速度をさらに引き上げた。腸内で膨らんだ屹立の硬さと太さから、ギユネイの昂ぶりが伝わる。「はううっ、しゅごい、お尻、ホントにしゅごい！ 漏れちゃいそう、出ひゃいそうなのに、ぞくぞく、する、オマ×コみたいに気持ち、イイ……ッ」

完全に肛悦の虜となったミリスが、いよいよ初めてのアナルオルガに向けて上昇を開始した。

（こんなのダメに決まってる、絶対にいけないってわかってる……だけど、だけどイキたい……後ろの穴でもイキたい……ギユネイの極太オチ×ポで、思い切りイッチャいたい……!!）

だが、ミリスはなかなか待望の初アクメに達しない。乳首と膣内をマリナにまさぐられ、浅い絶頂には数回至っていたが、肝心のアヌスでイケないのだ。

（なんで、なんでえ……ああ、イキたい、イキたい、イキたい……ッ！ 早く止めを刺してよ、いつもみたいにアンタのコレで、あたしをめちやくちやにしなさいよ、ギユネイ！）

もどかしさに新たな涙をこぼすミリスの願いは、届いた。ギユネイではなく、アイシャに、だったが。

「ギユネイ、あまり私の娘を苦しませないでちょうだい。後生だから、ミリスを楽にさせてあげて」

娘たちの痴態をただ見ているだけだった王妃が、ミリスを貫くギユネイの股ぐらに手を潜らせた。そして、己の娘の尻穴を犯す男の陰囊を優しく、ほぐすように揉み出す。

「くおおっ!? ア、アイシャ様!」

ギユネイが珍しく、驚愕の声を上げた。

「早く、ミリスを果てさせてあげて。……ちゅっ」

アイシャはたっぷりと子種の詰まったふぐりを丁寧にまさぐりつつ、ギユネイの、エルフとは違って短い耳にキスをした。さらに汗だくの背中に抱きつき、豊かな乳房を押し当てる。

「しょ、承知しました、アイシャ様っ!」

ミリスへの返事と同じセリフだったが、声は完全に上擦っていた。

(嘘、ギユネイのが、またおっきくなっただけ!? 母様、ギユネイになにしたの!?)

直腸を穿っていた肉棒が、禍々しく膨張したのがわかった。また、ピストンの勢い

も増している。

「ギユネイ、次は私ですよ。私が娘たちの代わりに犠牲になります。だから、これ以上はもう……ね？ はむっ」

アイシャがギユネイの反対側の耳を甘噛みする。ミリスやマリナよりも硬く尖った乳首を夫以外の男に擦りつけつつ、睾丸をいじり続けて射精を促していた。

「おおっ、ふっ、ふっ、ふおおオッ！」

余裕を失ったギユネイが、動物のような声とともに腰をぶつけてくる。ギユネイをここまで昂ぶらせたのが自分でない事実には不満を覚えたミリスだったが、すぐにどうでもよくなった。ついにオルガスムスの波が迫ってきたせいだ。

「ああ、ミリス、達するのね。わたくしも一緒に……あっ、ああ……っ」

ギユネイに続き、マリナの指も激しくなる。姉妹の蜜壺から、くちゅくちゅと卑猥な水音が立つ。

「ほっ、ほっ、ほおっ、んほおっ！ ほじほじ、りやめ、イク、こんらの、絶対に、イク、イグ……ッ！ お尻、らのに、オマ×コじゃない、ろにい！」

未婚の王女が発してはならない、牝の声だった。不浄の穴を犯された女が、姉と母の前で見せてはならない姿だった。

（お腹、溶ける、お尻が、肛門が熱い……来る、来る、今度こそイク、イケるう



……ダメ、ダメダメダメ、あたし、ホントにイク……アナルでイク……ッ!!)

だらしなく舌を垂らし、肢体を震わせ、絶頂潮をマリナの手に浴びせながら、ミスは達した。膣ではなく、排泄口で絶頂してしまう。

「りやめえ、イッグ……イグイグ……おひりでイグ……ギユネイのオチ×ポで、イク……アーツ、アーツ、アアアアーツ!!」

「ミス様、ミス様……ウウツ!!」

ミリスの初アナルアクメを見届けたギユネイが、腰を引き絞り、ザーメンを放った。スライムに蕩かされ、ペニスで躰けられた腸壁に、大量の白濁マグマが襲いかかる。

「あひっ、ひい、はひいひい……!!」

オルガスムスの真っ最中に、新たな性感帯として覚醒した直後の粘膜を灼かれたミスは、連続して肛悦を迎える。

「ああ、ミスも知ってしまったのね、お尻の……ケツマ×コの悦びを……アッ、アッ、わたくしも、もう……イク……イキます……ンン……!」

一瞬悲しみの表情を浮かべたマリナだったが、ミリスを追うように自慰アクメにその美しい顔を淫蕩に蕩かした。

そんな姉妹の痴態を見下ろしたまま、ギユネイは緩やかな抽送を続け、次々と精子を放ち続ける。

「イヤ、イヤ、もお、無理い……お腹、ぱんぱん……お尻、ダメに、なるう……あつ……ああ……」

鮮烈すぎるアナル絶頂に、ミリスの意識は朦朧とする。そのくせ、につきき男の剛直を締めつける括約筋はいっこうに緩まない。初めて知った背徳の悦びに、全身の痙攣が止まらないのだ。

（あたし、また穢されちゃった……でも、いいんだよね？ だって、みんなのため、なんだもん……あたしたちが頑張れば、こいつはまだまだ役に立つんだから……）
ようやく射精も止まり、硬度も若干落ちたと感じた刹那、ギユネイのペニスがびくりと跳ね上がった。

「ギユネイ、私の可愛い娘から、その醜くおぞましいモノを早く抜きなさい」
のそりと首だけを回して背後を見ると、アイシャがギユネイの首筋に歯を立てていた。ミリスには、キスマークをつける行為にも感じられた。

「も、もしもまだ物足りないというのなら、私が代わりになってあげますから」
ミリスが初めて目にする、母親の女の側面だった。

「アイシャ様からそのようなお言葉をいただいては、このギユネイ、遠慮はできなくなりますよ？」

にやりと笑った魔術師の分身が一瞬にして完全復活を遂げると、ミリスの菊門から

引き抜かれた。解放感よりも、寂しさがミリスを襲う。

「お待ちなさいギユネイ。お母様を辱める真似は許さないと言いましたよ。あなたの薄汚い欲望は、わたくしが受け止めます。だから、お母様やミリスには二度と手を出さないと誓いなさい」

ミリスの下から這い出したマリナが、ギユネイに裸身を寄せる。先程までミリスの蜜壺をいじっていた指が、雄々しく反った勃起を握る。一人の男をエルフの美女が前後から挟む格好だった。

「ああ、どうやら私の命運はすでに尽きていたようですね。ミリス様の初めてをいただけただ直後に、アイシャ様とマリナ様にこのように密着されるなど、現実ではあり得ませんから」

「その白々しい演技はおやめなさい、ギユネイ」

「すべてあなたの思い通りでしょうに。この悪魔……っ」

わざとらしく肩をすくめるギユネイを、王妃と第一王女が睨む。しかしその瞳には、隠しきれない女の、牝の欲望が宿っていた。

まだ肛悦の余韻が抜けきらないミリスの前で、母と、姉が組み敷かれた。

衰えを知らない牡杭が、アイシャとマリナを穿つ。

邪悪な人間の腕の中で、二人が甘い貌を見せる。

「あたしも……あたしにも……っ」

気づくと、ミスは先程のアイシャと同じようにギュネイに背後から抱きついていてた。

新たな関係の、そして終わりの瞬間へのカウントダウンの始まりとなる夜だった。